

2026年度夏期コース報告

結城佐織、橋本佳子、青木惣一、平野絵理香
加藤陽子、松田さおり、武藤葉子、杉松香苗

1 はじめに

アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター（以下、IUC）は、9月から翌年6月までの40週間の年間コースとは別に、6月中旬から8月上旬までの7週間の夏期コースを設置している。2026年度の夏期コースは2026年6月18日（木）から8月5日（水）まで実施された。受講者は35名で、学部在籍者2名、学士号取得者2名、修士課程在籍者または修士号取得者14名、博士課程進学予定者または在籍者16名、博士号取得者1名であった。講師は15名で、専任講師4名、非常勤講師11名であった。本稿では第2章で教育活動、第3章で受講者による評価、第4章で今後の課題について報告する。

2 教育活動

2-1 概要

夏期コースのホームページにあるように、夏期コースは以下の4つの目標が達成できるよう設計されている。

- ・日本社会に違和感なく受け入れられる待遇表現や言語行動を身につけ、場面に応じて適切かつ正確に使用することができる
- ・専門分野に関する資料や文献を理解し、論理的な文章を書ける
- ・自分の専門に関する口頭発表ができる
- ・自身の専門分野に限らず、様々な言論について教養ある日本人と意見を交換できる

通常授業は週5日、1日4コマ行われる。午前中に2コマ（第1時限10:00–10:50、第2時限11:00–11:50）、午後に2コマ（第3時限13:00–13:50、第4時限14:00–14:50）という構成で、毎週金曜日の午後には準正課活動として講演会や校外学習が実施された。3週間目には中間試験、最終週には期末試験が行われ、いずれも筆記試験と口頭試験によって受講者の到達度が測られ、結果についての個別指導も行われた。

2026年度は高度な専門性を有する受講者が短期間で集中的に日本語力を伸ばす場にすることを目指した（参照：大橋ほか 2025）。さらに受講者間の交流促進などを目的として、映画やビデオ鑑賞、日本語の表現の紹介などの希望者参加型の非正課活動を実施した。

2-2 正課活動

受講者はコース開始前に受けた読解・漢字・文法・聴解のオンライン試験の結果と、初日に受けた筆記試験、口頭試験の結果に基づき、6つのクラスに分けられた。各クラスは5～6名で構成され、1名の担任に加えて、1～2名の副担任が指導にあたった。以下では各クラスの概略を報告する。なお、使用教材に関しては一部の記載であることを了承いただきたい。

【夏草クラス】担任：青木惣一、副担任：加藤紀子、石川晶子

【コース目標】

1. 読む

- ・論説や評論文等、ある程度専門的な文章をおおよそ理解できる。

2. 聞く

- ・日常的な会話、ディスカッションなどで要点を聞き取ることができる。
- ・ニュース等を聞いて概要が理解できる。

3. 話す

- ・会話の中で自然な形で自分の経験を簡潔にわかりやすく表現できる。
- ・ある事柄を説明し、そのことについての自分の意見をまとめたかたちで表現し、それについての話し合いを適切な形で維持できる。
- ・場面や相手に合わせた表現を適切に用いて相手に働きかけることができる。(待遇表現)

4. 書く

- ・抽象度の高い事柄について、文法的誤りが少なく自説を説得力のある形で表現できる。

【時間割】

	月	火	水	木	金
10:00-10:50	基礎発話練習 ニュース報告	基礎発話練習 ニュース報告	基礎発話練習 ニュース報告	基礎発話練習 ニュース報告	基礎発話練習 ニュース報告
11:00-11:50	読解	読解	読解	読解 ディスカッション	読解
13:00-13:50	発表 話し合い	発表 話し合い	発表 話し合い	発表 話し合い	準正課活動・ 課外活動
14:00-14:50	待遇表現	待遇表現	待遇表現	待遇表現	準正課活動・ 課外活動

アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター (2024)『20の場面で学ぶ敬語コミュニケーション』 ジャパンタイムズ

許明子・宮崎恵子 (2013)『レベルアップ日本語文法中級』くろしお出版

TBS News DIG (<https://newsdig.tbs.co.jp/>)

- 以下の評論文・エッセイ・論文・小説の一部（使用順）

田中克彦「母語と母国語」

多和田葉子「国境を越えること」

山崎和佳子「揺れ動く「真」と「贋」」

John W. Cheng「現代日本における陰謀論とその信者像」

辻隆太朗「陰謀論へのイントロダクション」

村田沙耶香「書かなかった小説」

夏目漱石「夢十夜」

大塚英志「物語消費論ノート」

西岡 竜誠「「何度も外交問題に」日本の教科書に向けられる諸国からの視線"歴史認識の巨大な溝"の背景を東大合格者が解説」

『詳説日本史』（山川出版社）

『日本史探究』（実教出版）

『日本人の歴史教科書』（自由社）

國崎万智「歴史歪める狙いは「自分たちが上」維持したいから。」

クラスメンバーの全員が大学院生であり、専門分野の研究は進んでいるが、日本語の文献はまだあまり読んだことがなく、また、ライティング力に比べ、スピーキング力が弱めだが、将来的に日本語で学術研究者と交流を持ったり、学会に参加したりする必要性があることなどが共通していた。そのため、以下の4つの方針を立ててカリキュラムを構築した。

- ① 日常会話から専門分野の発表やディスカッションまで、できる限り発話の機会を増やす。
- ② 読み物は小説から専門分野の論文まで、多少難しくても、受講者の興味を引くものを選び、話し合い練習に繋げる。
- ③ 文法学習は通常の会話練習の中で、特に弱いと思われた項目（授受表現、使役・受身、敬語等）のみに絞り込んで学習する。
- ④ 待遇表現の学習に力を入れる。特に定型表現を誤らずスムーズに言えるよう繰り返す。

練習する。

読み物は受講者の専門分野が異なっても、共通の問題意識が持てるよう、「物語の構築」という大枠となるテーマを設定して個々のユニットを作成したが、それが功を奏し、専門分野を超えての積極的なディスカッション参加へとつながったように思う。大学院生が中心のクラスにおいては特に、読み物の選定が大きな鍵になることをあらためて実感した。また、短期プログラムにおいては日本語力向上を実感することが難しいということを配慮し、読み物に現れた語彙や文型、表現、敬語コミュニケーション上の表現パターン等の学習を強調することで、プログラム終了後の達成感を得やすくする工夫もした。

(文責：青木惣一)

【夏鳥クラス】担任：平野絵理香、副担任：千田昭予、長嶺倫子

【コース目標】

1. 読む

- ・新しい語彙や文型表現を学び、文脈の中で理解できるようになる。
- ・短い新聞記事や小説、評論文を読み、要点や筆者の意見を理解できるようになる。

2. 聞く

- ・自然な速さの日本語を聞き取り、話題の要点や話し手の意図を理解できるようになる。
- ・日常的・社会的な話題について、まとまりのある会話や説明を理解できるようになる。

3. 話す

- ・自分の経験や意見を、理由や具体例を含めながら段落レベルで伝えられるようになる。
- ・場面や相手に応じて、適切な表現スタイルを使い分けられるようになる。

4. 書く

- ・話し言葉と書き言葉の使い分けができるようになる。
- ・読んだ内容を要約し、それに対する自分の意見を簡潔に書けるようになる。
- ・複数の文をつなぎながら、まとまりのある段落レベルの文章を書けるようになる。

【時間割】

	月	火	水	木	金
10:00-10:50	待遇表現	待遇表現	待遇表現	待遇表現	待遇表現
11:00-11:50	読解	読解	読解	読解	読解
13:00-13:50	文法	文法	文法	文法	準正課活動・ 課外活動
14:00-14:50	ミニ発表と 話し合い	ミニ発表と 話し合い	ミニ発表と 話し合い	ミニ発表と 話し合い	準正課活動・ 課外活動

アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター (2013)『KANJI IN CONTEXT』ジャパンタイムズ

アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター (2024)『20の場面で学ぶ敬語コミュニケーション』ジャパンタイムズ

清水正幸・奥山貴之 (2025)『日本語受講者のための読解厳選テーマ10中上級』凡人社
友松悦子・和栗雅子 (2024)『初級日本語文法総まとめポイント20』スリーエーネットワーク

本クラスでは、使用教科書の内容を網羅するとともに、初級文法の復習や読解教材に現れる中上級レベルの文型・表現を、実際のコミュニケーションの中で運用する活動を積極的に取り入れた。特に、段落レベルで内容を組み立てながら話し合いや発表を行うことで、表現の定着と運用力の向上を図った。また、授業冒頭には毎日5分程度KANJI IN CONTEXTをIUCの受講生が使用できるWeb版で実施し、第3水準の漢字を中心とした漢字学習を継続的に行った。

前半は身近なテーマでのミニ発表とディスカッション、後半は受講者が各自の専門分野に関連する生教材（文学作品2名、新聞記事3名、美術作品の解説1名）を用いた読解・発表活動を行い、最終発表へとつなげた。その結果、専門的な内容について論理的に発表し、質疑応答を行う力の向上が見られた。

一方で、内容が充実していた反面、学習内容の消化・定着にはさらに時間が必要であると感じた。特に、本クラスの受講者は専門性が高く、伝えたい内容とそれを日本語で表現する力との間にギャップが見られることがあり、作文や発表に対する個別フィードバックや推敲の時間をより十分に確保する必要性を感じた。

しかし、受講者は自らの専門分野について積極的に発信しようとする姿勢を身につけ、最終発表ではその成果が十分に見られた。実践的な活動を通して、専門分野について日本語で考え、伝える力の向上につながったと考えられる。

(文責：平野絵理香)

【夏山クラス】担任：加藤陽子、副担任：本間光徳、篠崎佳子

【コース目標】

1. 読む

- ・読むためのスキルを身に付け、文章の内容を正確に理解できる。
- ・文章を正確に読むための語彙・漢字を身につけることができる。

2. 聞く

- ・ニュースを聞き、必要な情報が正確に取れる。
- ・討論や発表で、話し手が主張している重要な点が理解できる。

3. 話す

- ・読み物やニュースの話題について、自分の意見が話せる。
- ・話し相手、会話の場、会話の目的、話題に応じた適切な待遇表現が使える。
- ・日本語らしい発音ができ、適切な速さで話せる。

4. 書く

- ・自分の専門について紹介する文章を書くことができる。
- ・文法的に正確で構成がわかりやすい文章とメールを書くことができる。

【時間割】

	月	火	水	木	金
10:00-10:50	文法	文法	漢字／作文	文法	文法
11:00-11:50	読解	読解	ニュース報告	読解	ニュース報告
13:00-13:50	討論	討論	討論	学術スキル	準正課活動・ 課外活動
14:00-14:50	待遇表現	待遇表現	待遇表現	討論／発表	準正課活動・ 課外活動

石坂洋二郎・藤垣裕子 (2019)『続・大人になるためのリベラルアーツ 思考演習12題』

東京大学出版会

益田裕介 (2025)「AIカウンセリングがはらむ依存症リスク」『文藝春秋オピニオン

2026年の論点100』文芸春秋社 p.244-245

竹田ダニエル (2024)「『自分たちの世代』意識、強さに違い 竹田ダニエルの日米比較
世代論」朝日新聞デジタル

https://digital.asahi.com/articles/ASS1935H4S14ULLI00V.html?_requesturl=articles%2FASS1935H4S14ULLI00V.html&pn=15 (2026年6月18日閲覧)

友松悦子・和栗雅子 (2004)『初級日本語文法総まとめポイント20: 短期集中』スリーエーネットワーク

本クラスの受講者は大学院生5名（博士課程3名、修士課程2名）、学部卒業生1名で構成され、専門は文学、歴史学、美術史、言語学であった。初級文法は既習であるものの、口頭での運用力に正確さ・自然さの点で改善すべき点が多く、基礎的な文法項目の復習と正確な運用、表現力の向上が具体的な目標であった。

使用した文法教材は初級文法の復習を主眼とするものではあったが、授業で毎回、受講者から多くの質問が寄せられ、このレベルで復習を行う意義はあったと思われる。ただし、一部の受講者から「文法教科書の内容が易しく、新たな学びがないのではないか」という

懸念がコース開始前のオリエンテーション時に出されたため、読解の難易度を上げ、そこに出てくる表現を取り上げて「文型・表現」として説明・練習することとした。

授業で工夫した点は、理解と産出のバランスである。午前は文法・読解・漢字等の理解中心の内容に、集中力が途切れがちな午後は討論や待遇表現などの産出中心の内容にした。また、討論の時間を毎日必ず確保することも工夫した点の一つである。読解やニュース報告の際には取り上げた話題に関する討論のポイントを必ず入れるようにした。そして、討論の際に「学術スキル」という時間で紹介したフォーマルな表現を用いることを促し、練習を重ねた。受講者が日本語を産出している際の間違いは、できるだけその場で修正を行った。

その他の活動として、「ニュース報告」で「今」の話題に触れ、「待遇表現」の授業で会話の型に沿った「目的を意識した会話」を進める練習を行った。漢字はKANJI IN CONTEXTの第三水準から毎週2回分、計約130字の読み書きを練習し、作文では事実と意見の書き分け方やフォーマルな書き言葉に適した表現などを学習した。

このような活動を通して、クラスの目標は達成できたのではないかと考えられる。受講者同士の仲も良く、学び合うことを楽しめる活発な良いクラスであった。

来年度の課題としては、発音指導の強化、中級文型と語彙の体系的な学習が挙げられる。個々の受講者のニーズにできるだけ沿った指導を心がけたい。

(文責：加藤陽子)

【夏柳クラス】担任：松田さおり、副担任：後藤恵利

【コース目標】

1. 読む

- ・中上級レベルの読解教材を正確に理解する力を身につける。
- ・文章の文化的・社会的背景を意識しながら読む力を養う。

2. 聞く

- ・ニュースなどでよく使われる語彙や表現を聞き取る力をつける。
- ・会話や場面に合った表現を理解できるようにする。

3. 話す

- ・状況に応じた自然な日本語で話す力を身につける。
- ・発表や討論の際に、定型表現や構成を使って意見を述べることができるようにする。

4. 書く

- ・文法的に正しく、わかりやすい日本語を書く力を養う。
- ・漢字や語彙を適切に使って、自分の考えを正確に表現できるようにする。

【時間割】

	月	火	水	木	金
10:00-10:50	文法	文法	文法	読解	読解
11:00-11:50	待遇表現	待遇表現	待遇表現	読解	読解
13:00-13:50	聞く	発表	聞く	漢字・語彙	準正課活動・ 課外活動
14:00-14:50	討論	話し合い	討論	文作り	準正課活動・ 課外活動

アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター (2013)『KANJI IN CONTEXT』ジャパントイムズ出版

アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター (2024)『20の場面で学ぶ敬語コミュニケーション』ジャパントイムズ出版

瀬川由美・紙谷幸子 (2023)『改訂版 ニュースの日本語 聴解50』スリーエーネットワーク

友松悦子・和栗雅子 (2004)『短期集中 初級日本語文法総まとめ ポイント20』スリーエーネットワーク

仲山淳子 (2021)『日本語文法ブラッシュアップトレーニング』アルク

目黒真実 (2009)『中上級受講者のための日本語読解ワークブック』アルク

NHK (2026)「NHK NEWS WEB」<https://www3.nhk.or.jp/news/> (2026年8月10日最終閲覧)などを活用した自作教材

夏柳クラスでは、設定した授業目標は概ね達成できた。受講者は積極的に参加し、日本語で話すことへの躊躇が減り、自信を持ってコミュニケーションを図る姿が見られた。一方、「話す」「書く」などの産出面には課題が残った。

授業では、文法誤りの共同推敲、反転授業、生教材の活用を取り入れ、受講者同士の話し合いや発表準備に重点を置いた。また、質問への丁寧な対応と個別フィードバックに力を入れ、受講者からも好評だった。ただし、時間を要する個別フィードバックを継続するための時間確保が課題である。

読み物については、量や難易度に物足りなさを感じる受講者がいる一方、漢字の識字に困難があり、高度な文章を読むことが難しい受講者もいた。今後は、テーマや難易度の異なる教材を用意するとともに、振り仮名や語彙支援、音声資料などを活用し、それぞれの受講者が適切な負荷で学べるよう工夫したい。また、実際のメール作成や日本人との交流など、日本語を現実の場面で使う機会を増やし、運用力の向上につなげたい。

(文責：松田さおり)

【夏空クラス】担任：武藤葉子、副担任：高橋佳奈子

【コース目標】

1. 読む

- ・効果的に読むための手がかりを知り、必要な情報を見つけられるようになる。
- ・論理的文章の構成を知り、学術論文を読むための基礎となる表現や文型が理解できるようになる。

2. 聞く

- ・ある程度の長さを持つ口頭発表やニュースなどを聞き取り、理解できるようになる。
- ・日常的な会話やディスカッションで、相手の話の要点を聞き取れるようになる。

3. 話す

- ・まとまった情報をわかりやすく伝えることができるようになる。
- ・人間関係や場面・内容に合った話し方ができるようになる。
- ・聞いたり読んだりして得た情報をもとに、あるテーマについて説明したり意見を述べたりすることができるようになる。

4. 書く

- ・適切な文型や表現や語彙を使って、内容や目的にふさわしい文章が書けるようになる。

【時間割】

	月	火	水	木	金
10:00-10:50	漢字 文法	漢字 文法	漢字 文法	漢字 文法	漢字 文法
11:00-11:50	読解・聴解	読解・聴解 視聴覚教材	読解・聴解 視聴覚教材	読解・聴解	読解・聴解
13:00-13:50	待遇表現	待遇表現	待遇表現	待遇表現	準正課活動・ 課外活動
14:00-14:50	会話 スピーチ	会話 スピーチ	会話 スピーチ	会話 スピーチ	準正課活動・ 課外活動

友松悦子・和栗雅子著 (2004)『初級日本語文法総まとめポイント20』スリーエーネットワーク

アカデミック・ジャパニーズ研究会編著 (2015)『改訂版 大学・大学院留受講者の日本語 ①読解編』アルク

アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター (2024)『20の場面で学ぶ敬語コミュニケーション』ジャパントイムス

瀬川由美、紙谷幸子 著 (2022)『改訂版 中級からはじめるニュースの日本語 聴解40』

スリーエーネットワーク

夏目漱石 (1903)『坊っちゃん』青空文庫

星新一 (1971)『ボッコちゃん』新潮文庫

是枝裕和 (2016)『映画を撮りながら考えたこと』ミシマ社

是枝裕和 (監督) (2015)『海街diary』東宝

本クラスには、初級日本語を学習した後、一定の中断期間がある受講者が多く、既習語彙・文法ともに定着が十分ではなかった。そのため、基本文法の定着に重点を置き、授業を行った。論文読解およびニュースの聴解には、使用語彙を調整した既存の教材を用い、コース後半には生教材として小説や映像資料なども取り入れた。また、語彙の定着を図るため、学習した語彙を用いた会話の機会も設けた。毎回の授業で実施したKANJI IN CONTEXTを用いた漢字の読み練習と聴解、文法の授業内容が好評であった。他にも、1回の授業で読み切れる長さの小説を読み、その内容について話し合う活動は、特に好評であった。

学習成果については、文法の記述式課題では誤答が見られたものの、選択式の問題ではほぼ正確に解答できる程度まで定着した。読解力の向上も見られた。会話においても、当初は要点を明確に伝えることに課題があったが、コース後半には、授業内で学んだ語彙を積極的に使用し、相手に分かりやすい形で質疑応答ができるようになった。発表会においても、学習した表現を適切に使用し、質疑応答を行っていた。

初級文法については一定の定着が確認できた一方で、受講者の混乱を避けることを優先したため、中上級の文法を扱う機会が十分ではなかった。読解授業では、中上級の文法項目もさらに取り上げるべきであった。加えて、自由会話で当初から見られた時制の誤りやフィラーの多用は、十分には改善されなかった。教材だけでは確認できない文法の運用については、会話の中で生じた誤りをより丁寧に訂正すべきであった。

(文責：武藤葉子)

【夏海クラス】担任：杉松香苗、副担任：市川佐保子

【コース目標】

1. 読む

- ・多様なジャンルの文章を読み、内容を理解する。

2. 聞く

- ・ドキュメンタリー、報道番組等を視聴し、内容を把握する。
- ・話し合いの中で他の人の意見、その根拠等を正確に聞き取る。

3. 話す

- ・テーマに沿った話し合いの場面で適切に自分の意見が言えるようにする。
- ・様々な会話の場面で、相手、内容などに配慮して表現を使いわけ。

4. 書く

- ・論理的な文章構成を意識しながら、自分の意見等を400～600字程度の文章にわかりやすくまとめる。
- ・最終的に3000字程度の発表スクリプトを書く。

【時間割】

	月	火	水	木	金
10:00-10:50	場面別会話練習	場面別会話練習	場面別会話練習	場面別会話練習	場面別会話練習
11:00-11:50	文法	文法	文法	文法	論文の書き方
13:00-13:50	読解	読解	視聴	読解	準正課活動・課外活動
14:00-14:50	読解	読解	視聴	読解	準正課活動・課外活動

アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター (2024) 『20の場面で学ぶ敬語コミュニケーション—気持ちが伝わる中級からの日本語待遇表現』 ジャパンタイムズ出版

小川誉子美・三枝令子 (2019) 『日本語文法演習—ことがらの関係を表す表現—複文—改訂版』 スリーエーネットワーク

浜田麻里・平尾得子・由井紀久子 (1997) 『大学生と留学生のための論文ワークブック』 くろしお出版

夏海クラスでは、待遇表現の習得を目指した会話練習、文章作成のための文法表現の復習に加え、文章や動画の内容を理解し、それに基づく話し合いを通して口頭運用能力を高めることを目的として、カリキュラムを構成した。文章の選定にあたっては、現代日本社会の課題や日本文化など幅広いジャンルを扱い、抽象度の高い話し合いができるよう配慮した。受講者は熱心に参加し、自分の意見をしっかり述べていた。コース後半では、各受講者が文章を自分で選び、その文章の背景や概要を日本語で説明した後、議題を設定して話し合いを進めるという、受講者主体の活動を取り入れた。これにより、受講者は自分の専門分野に関する新たな視点を得ると同時に、日本語習得における自身の弱点を自覚し、今後の学習に生かすことができたのではないかと考える。待遇表現の会話練習では、実際のロールプレイに加え、配慮が必要な場面に関する経験や疑問を共有することで、より深

い理解を促すことができた。今後は、話し合いにおいて互いの意見を踏まえ、より良い結論や合意形成を目指す建設的なやりとりができるよう指導していきたい。

(文責：杉松香苗)

2-3 準正課活動

2-3-1 校外学習、講演会、専門別活動、クラス別活動

2026年度の夏期コースでは、金曜日の午後に校外学習、講演会、専門別活動、クラス別活動を実施した。

「鎌倉の日（6月26日）」

全員で鎌倉・円覚寺において坐禅を体験後、午後はクラス別に鎌倉ガイド協会の案内で長谷寺、鎌倉大仏殿を訪れた。

「講演会（7月3日）」

日本舞踊中村流八代目家元・二代目中村梅彌氏を招き、日本舞踊の解説および舞踊体験の指導を受けた。

「専門別活動（7月24日）」

受講者間交流や卒業発表に向けたスライド活用の効果を体験することを目的とした。金曜日担当講師の専門や特技に関する発表を聞いた後にディスカッションやアクティビティを行う活動を、前半と後半の2回実施した。テーマは国際協力、日本国憲法、書道、カタカナ語、日本語の発音、翻訳の6つで、受講者は興味のあるものを選んで参加した。

「クラス別活動（7月17日、31日）」

クラス内の親睦を深めることを目的として、各クラスが主体的に企画した活動を実施した。活動内容は多様で、美術館や資料館を訪れたクラスもあれば、二クラス合同でカードゲーム等を行ったクラスもあった。

(文責：橋本佳子)

2-3-2 その他の準正課活動

その他の準正課活動として「所長のクラス訪問」および「会話パートナー」も行われた。所長のクラス訪問は、バートン所長が各クラスを訪問し30-50分程度受講者との交流を図るものである。この活動では主に受講者からの質問に所長が答えるという形式が取られており、質問の内容はIUCの所長としての日々の業務やこれまでの経験に加え、日本研究者

としての歩み、現在の日本研究、日本語学習、現在の日本社会に対する所見、さらには趣味である写真に関する話題まで、幅広いテーマが扱われていた。

「会話パートナー」は母語話者との自由会話を希望する受講者と、IUCの講師、教材助手および日本語教育に関心を持つボランティアがパートナーとなって、一対一で会話をする活動である。20分間程度の会話を週一回、対面かWEB会議システムZoomで行い、計26名の受講者が参加した。

3 受講者による評価

2026年度の受講者評価アンケートはGoogle Formを用いて実施し、8月4日（火）に受講者へメールで送信した。回答期限は8月7日（金）23:59とした。35名中31名から回答があり、回収率は88.6%であった。質問項目はA. プログラムの全体評価、B. プレイスメントテスト、C. IUCからの情報提供、D. クラス授業、E. 準正課活動、F. 教職員へのコメント、G. 奨学金、H. 生活面の8セクションで構成され、英語で実施された。本稿ではプログラムの教育内容と運営を検討する上で関連の深いA. プログラムの全体評価、D. クラス授業、E. 準正課活動を中心に報告する。

3-1 プログラム全体への評価

プログラム全体への評価はExcellentが21/31名（67.7%）、Goodが10/31名（32.3%）であり、FairおよびPoorは0名であった。また「このプログラムを他の学生に推薦するか」という設問に対しては、31名全員が「はい」と回答した。以上の結果から、2026年度の夏期プログラムは受講者から肯定的な評価を得たといえる。

3-2 クラス授業・発表会への評価

表1にクラス授業および卒業発表会に関する評価を示す。

表1 クラス授業および卒業発表会に関する評価

	Excellent	Good	Fair	Poor	N/A
クラス授業全体への評価	21	9	1	0	0
教材	23	7	1	0	0
課題の量と質	14	14	2	0	1
中間・期末試験の内容、指導法、フィードバック*	20	11	0	0	0
卒業発表会	21	9	1	0	0

*1つの設問で3つの質問を聞いた

クラス授業全体への評価はExcellentが21名、Goodが9名、Fairが1名であり、プログラム全体への評価と同様に肯定的な評価を得た。個々の回答を見ると、プログラム全体への評価とクラス授業全体への評価は31名中28名(90.3%)で概ね一致していた。

教材についてはExcellentが23名、Goodが7名、Fairが1名であり、全体として良い評価を得た。自由記述では生教材や幅広い分野の読み物を評価する意見が見られた。一方、文法教材については内容が基本的すぎる、説明や例文が不足しているとの指摘もあった。また学術論文の読解やアカデミックな議論につながる高度な文法、より多様な読み物を求める声も見られた。読解教材を受講者に合わせて選択していたクラスでは、教材に対する評価が高い傾向が見られた。7週間という短期間の夏期コースでは、受講者のレベルや関心に応じて教材を柔軟に調整できるようにしておくことが望ましいと言えるだろう。

課題の量と質についてはExcellentが14名、Goodが14名、Fair2名が、N/Aが1名であり、他の項目と比較して評価にばらつきが見られた。自由記述でも課題の量の多さが継続的な学習や読解力の向上につながったという意見がある一方、負担が大きいとの指摘も見られた。また課題に追われ、教員からのフィードバックを十分に復習する時間が取れなかったという意見もあった。夏期コースのホームページでは、授業内容の定着を図るため授業外に1日5時間以上の自主学習が求められるとしている。しかし「毎日、予習・復習にどのくらいの時間を費やしたか」という設問に対し、5時間程度または5時間以上と回答した受講者は7名であった。実際の学習時間には個人差があるものの、夏期コースで想定される授業外学習の時間については今後オリエンテーション等で改めて周知する必要があるだろう。

課題の難易度については、難しくても挑戦できる程度がよい、個別のフィードバックがあるため対応できるという意見が見られた。個人面談でも、授業前にはやや難しいと感じても授業後には理解できる程度の教材や課題を求める声が聞かれた。こうした難易度の設定には細かな調整が必要となり講師の負担も増すが、単純に難易度を下げるのではなく、個別のフィードバックを行いながら適切な難易度を維持することが受講者の満足度を高める上で重要であると考えられる。

中間・期末試験の内容、指導法、フィードバックについてはExcellentが20名、Goodが11名であり、FairおよびPoorを選択した回答者はいなかった。自由記述でも少人数制の授業や教員からの丁寧なフィードバックを評価する声が見られた。7週間という短期間ながら日本語力の向上を実感したという回答もあり、発話や意見表明、読解、作文などが学習に有益であったとの意見が寄せられた。また教員による支援やクラスの雰囲気についても肯定的なコメントが見られた。

卒業発表会についてはExcellentが21名、Goodが9名、Fairが1名であった。自由記述では、より高度な内容に挑戦する機会となったことや教員による個別の支援を評価する声があった一方で、発表原稿やスライドの添削の方法、準備日程について改善を求める意見も見られた。Fairを選択した受講者は「自分自身はあまりよくできなかったと思うが、先生方は

皆親切だった」とコメントしている。この回答については卒業発表会の運営や指導に対する評価というより、自身の発表に対する評価が反映された可能性がある。受講者による卒業発表会のテーマについては別資料を参照されたい。

3-3 準正課活動への評価

準正課活動の評価をまとめると表2の通りである。

表2 準正課活動に関する評価

	Excellent	Good	Fair	Poor	N/A
鎌倉の日	11	12	4	0	4
日本舞踊講演会	24	6	0	0	1
クラス別活動	13	12	3	0	3
専門別活動	12	11	6	0	2
会話パートナー	18	4	1	0	8

最も評価が高かったのは日本舞踊の講演会で、「初心者向けの解説と専門家による本物の踊り、扇子や道具を使う体験、すべてに満足した」と高く評価するコメントがあった。「鎌倉の日」は天候に恵まれず、「大雨でさえなければ」という声が多かった。時節柄猛暑や雨天での実施となる可能性が高く、今後検討が必要である。昨年に続き2度目となる「専門別活動」については、教員の発表よりもインタラクティブな活動が多いクラスに対する満足度が高く、「毎週実施してほしい」「2つしか選択できず残念だった」というコメントもあった。「クラス別活動」については、カードゲームやテーブルゲーム等発話を促進する活動の評価が高く、「暑くても外出したかった」という声もあった。

「会話パートナー」に参加した受講者のうち22名がExcellent（18名）、Good（4名）と評価しており、コメントにはパートナーへの感謝の言葉が記されていた。

（文責：橋本佳子）

4 今後の課題

教育内容の充実に加え、受講者が安心して学習できる環境の整備についても課題が明らかになった。

受講者評価アンケートにおいて、外国で生活することが学習に影響する場合があるため、相談先の情報提供や助言などの支援を求める意見があった。メンタルヘルスに関する意見は例年寄せられている。年間コースには外部のサポート体制がある一方、夏期コースには同様の体制が整備されていない。短期間のコースであっても受講者が必要な支援を受けら

れるよう、相談先の確保や情報提供を含めた体制の整備が必要である。

また、2026年度は受講環境に関する相談が寄せられ個別に対応を行った。本件を踏まえ、受講者が安心して学習できる環境を整えるため講師を対象としたコース開始前の研修の実施に加え、受講者が問題を相談できる窓口や対応手順を明確にすることが課題となる。

5 おわりに

2026年度は大橋ほか(2025)で挙げられた課題を踏まえ、夏期コースが高度な専門性を有する受講者が短期間で集中的に日本語力を伸ばす場となるよう目指した。受講者評価からもこれらの取り組みは全体として肯定的に受け止められたことが確認された。一方、教育内容や受講者への支援体制については今後も検討すべき課題が残された。

最後に、本夏期コースの実施は講師陣による献身的な指導はもとより、スタンフォードオフィスのスタッフ、ならびに横浜の教職員による多大な支援と協力に支えられたものである。ここに改めて深く感謝の意を表したい。

参考文献等

アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター「サマープログラム」

<https://iuc-japan.fsi.stanford.edu/programs-summer> (2026年8月10日最終閲覧)

NPO法人鎌倉ガイド協会「NPO法人鎌倉ガイド協会」

<https://kamakura-guide.org/> (2026年8月10日最終閲覧)

大橋真貴子・高橋佳奈子・後藤恵利・白石恵利奈・松田さおり・川西由美子・杉松香苗・結城佐織 (2025)「2025年度夏期コース報告」『アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター教育研究年報』第14号 pp.69-92

筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター「筑波大学日本語テスト集[TTBJ]」

<https://ttbj.cegloc.tsukuba.ac.jp/> (2026年8月10日最終閲覧)

資料：卒業発表のテーマ一覧

1. アメリカ映画研究における小津安二郎：「反ハリウッド的な作家」という評価を問い直す
2. アメリカ海兵隊における情報将校の役割
3. 海を渡る木材：重源・栄西と12世紀の日宋仏教交流
4. 「戒」：自己と規則の境界へ
5. 教化運動とは何か

6. 現象学とは何か：近代日本哲学の発展について
7. 考古学におけるプラント・オパール分析
8. 古代中国の「養生」について：「自然」をめぐる嵇康と向秀の論争
9. 西行と短歌
10. 再生産労働としての代理出産：桐野夏生『燕は戻ってこない』における身体と感情
11. 「サイレントヒル f」における「狐憑き」のリメディエーション
12. 相模原障害者施設殺傷事件：障害者と犯罪者の狭間で
13. 「サラリーマンチャンネル」とは
14. 宗教とロボット：仏教を中心として
15. 1930年代の日本の女性雑誌における「中国」：中華料理から見る戦前の日常生活と帝国
16. 説話とは何か：説話・説話集・説話文学の違い
17. 単なる地図ではない：江戸図屏風
18. 蔦谷楽の地域間のアート
19. 中平卓馬の写真表現：奄美・吐噶喇列島を中心に
20. なぜ浮世絵は現在も研究され続けているのか：「美術」ではなかった浮世絵が、日本美術史の研究対象になるまで
21. 日本赤十字社と帝国主義：人道主義との関係を中心に
22. 日本で最初のミスコン：良家の淑女と芸者
23. 日本における同性婚実現への道のり
24. 日本の医療と医療保険
25. 日本の政党とウェブデザイン
26. BC級戦犯裁判：日本人弁護人の視点から
27. 風俗画に描かれた食
28. 平成レトロ映画とテクノロジー
29. 「まるき器を四角に置くが如く」：南総里見八犬伝、狂えるオルランド、近代トランステクスト性
30. 明治日本と近代中国の学校唱歌
31. 目は君に何を語るのか
32. 吉野山の表象：中世から近世初期にかけて
33. ラスプーチン：真実の姿
34. 理論家としての漱石：『文学論』と意識論について
35. 歴史から消えた真実：『グレー雪だるま』の証言

以上 50音順